

第6回 中心部震災メモリアル拠点検討委員会

- 日 時 令和2年2月4日（火）15:30～17:30
- 会 場 TKPガーデンシティ仙台勾当台 ホール1
- 出 席 者 植田今日子委員、遠藤智栄委員、大泉大介委員、佐藤翔輔委員、佐藤泰委員、志賀理江子委員、野家啓一委員、本江正茂委員
- 議 事 1 開 会
2 議 事
(1) 中心部震災メモリアル拠点に関する報告書のとりまとめに向けて
(2) 今後のスケジュールについて
(3) その他
3 閉 会
- 配布資料 資料1 中心部震災メモリアル拠点に関する報告書のとりまとめに向けて
資料2 中心部震災メモリアル拠点の事業プログラム・要素の整理
資料3 今後のスケジュールについて
参考資料1 第4回検討委員会における「拠点の軸」・背景と役割の相関図
参考資料2 第5回中心部震災メモリアル拠点検討委員会 意見整理表

○事務局（高橋室長）

それでは、ただいまから第6回中心部震災メモリアル拠点検討委員会を始めさせていただきます。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして誠にありがとうございます。本日の議事進行につきましては、委員長にお願いしたいと思っております。野家委員長、それではよろしくお願ひいたします。

○野家委員長

それでは、皆様よろしくお願ひいたします。まだ遠藤委員と志賀委員がお着きになっていないようですが、追って到着されることと思っております。

それでは、会議は議事次第に沿って進めてまいります。まず会議にかかる留意点等につきまして、事務局から説明をお願ひいたします。

○事務局（高橋室長）

それでは、はじめに傍聴の皆様へのお願ひでございます。本日お配りしております「会議の傍聴に際し守っていただきたい事項」をお守りの上、傍聴席以外に立ち入らないようお願いいたします。

次に、配付資料の確認をさせていただきます。本日は、委員の皆様のお座席に、次第と委員名簿、座席表、資料一覧、資料1から資料3及び参考資料1、2、また、会議資料ではございませんけれども、昨年11月10日に開催いたしましたシンポジウムの結果概要を置かせていただいております。資料の不足がございましたら、事務局までお知らせいただければと思っております。

続きまして、本日の出席状況についてご報告いたします。本日は、マリ・エリザベス委員より欠席する旨、また遠藤委員より若干遅れて出席する旨のご連絡を受けておりま

す。また、志賀委員も若干遅れているようでございますが、要綱第5条第2項による定足数は満たしていることをご報告申し上げます。

また、本日も議事録を作成いたしますので、ご発言の際にはお手元のマイクのスイッチをオンにさせていただき、ご発言の後、オフに戻していただくということをお願いいたします。

事務局からの留意点は以上でございます。

○野家委員長

ありがとうございました。

それでは、議事に入る前に本日の議事録署名委員を指名させていただきます。前回は佐藤翔輔委員にお願いしましたが、本日は佐藤泰委員にお願いしたいと思いますのですが、よろしいでしょうか。

○佐藤（泰）委員

（頷く）

○野家委員長

それでは、ただいまより本日の議事に入ります。まず、1番目は、「中心部震災メモリアル拠点に関する報告書の取りまとめに向けて」でございます。

この検討委員会も折り返し地点を過ぎたということで、そろそろ年度末も迫っておりますが、報告書にまとめることを意識する必要が出てまいります。

まず、前半は検討委員会として検討し、報告書にまとめる範囲について、皆様方と話し合いたいと思っております。

これまでの議論で出てきた目的や理念といった大枠から、機能や立地といった個別の要素まで幅広い検討課題がある中で、例えば機能や立地などについて、検討委員会の報告書としてどこまで具体的にまとめるのか。共通理解を形成した上で後半の議論に進みたいと思っております。

後半は、拠点の役割や機能について話し合いたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

前回は、これまでに広げたアイデアから、拠点の軸、さらにどのような役割、機能に力点を置くかという議論をしたわけですが、それらの議論を踏まえて、事務局が整理した資料もございまして、本日はそちらを参考にしながら、さらに具体的な機能やその要件などを議論していきたいと思っております。

それでは、まず事務局から資料の説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは資料1「中心部震災メモリアル拠点に関する報告書の取りまとめに向けて」に基づいて説明いたします。随時資料2や参考資料なども参照いたしますので、よろしくお願いいたします。

それでは、資料1をご覧ください。

まず、前回の共有・確認事項、こちらを確認したいと思います。

1番「具体的な“場”の必要性」。こちらが前回の議論に出ております。多様な主体と

ともに、時代にふさわしい形で災害文化を継承・創造し、災害文化を持つ都市・仙台としてのアイデンティティ構築に向けて、現状の取り組みでは足りないという認識のもと、中心部の拠点として新たな場が必要。このような議論がなされております。

そして2番「拠点の基本的方向性と役割について」です。なお、この方向性と役割を整理したプロセスにつきまして、次回お示しいただきたいというお話もございましたことから、参考資料1「第4回検討委員会における拠点の軸、背景と役割の相関図」をお付けしております。こちらはご参照いただくとしまして、方向性と役割、前回まとめた内容を説明させていただきます。

①基本的方向性。東日本大震災を初めとする災害の経験を生かし、災害とともに生きる社会のあり方を、災害文化として多様な主体とともにその時代にふさわしい形で継承・創造し、災害文化を持つ都市・仙台としてのアイデンティティを構築するとともに、そこで得た知見を国内外に発信する。

②役割。「多様な経験の共有・蓄積・発信」、「新たな知恵の創造と社会への実装」、「超長期の記憶の継承」、「広域的な連携」、こちらの4つを役割として整理いたしました。

③拠点の役割・要素の重みづけ。役割、要素を総花的に備えた拠点は現実的ではなく、実現に向けては力点を考慮した重みづけが必要ということで、力点を考えるために博物館型、広場型、ネットワーク型の3モデルで比較検討することを前回の最後に確認いたしました。

なお、この役割と要素をもとに、前回、ホワイトボードを使ってブレインストーミングで話した内容は、参考資料2「第5回中心部震災メモリアル拠点検討委員会意見整理表」にまとめてございます。

今回はこの参考資料2でまとめた内容、それからこれまでに議論した内容を全て踏まえまして、資料2「中心部震災メモリアル拠点の事業プログラム・要素の整理」を事務局で作成いたしました。こちらは先ほど申し上げました博物館型、広場型、ネットワーク型の3モデルを考えるために、これまでの意見の整理を行ったものです。

1枚目をご覧ください。左側の縦軸が役割です。「①多様な経験の共有・蓄積・発信」、「②新たな知恵の創造と社会への実装」、「③超長期の記憶の継承」、「④広域的な連携」。この4つの役割毎にこれまでの委員会意見をまとめさせていただきました。例えば、これまで出てきた「居合わせた人同士が伝え合う」、「写真を前に語り合う」、「節目で語り合う」、「対話を通じて個々の体験を共通の経験に高める」、「物語を紡ぎ直す」、「語り部の話を聞く」。こういった要素については、多様な経験の共有・蓄積・発信に整理され、事業プログラムとして、「【経験の共有】意識的に経験を語る、聞く機会を創出する」。そして、これに必要な要素として、空間と仕組みと人材があり、空間としてはこのような経験の共有を行うのであれば、人が集まれる空間が必要であろうと。人材としては、このような機会を企画する人、それから多様な人、団体とつながる、それを構築できるスタッフが必要であるだろうと。そのような形で、役割とこれまでの意見、想定されるプログラム、必要な要素を整理いたしました。

この整理に基づきまして、2ページ目以降ですが、この必要な要素ということで、空間、仕組み、人材を整理したわけですが、2枚目の2-1が空間、2-2が仕組み、2-3が空間と仕組みの掛け合わせ、次のページの2-4が人材（スタッフ）の整理と書いてございます。これらは1枚目で整理した内容を、2-1であれば空間のところに着目をして整理し直したものでございます。例えば、その人が集まれる空間。こちらでできる事業プログラムの想

定が、経験の共有で意識的に経験を語る、聞く機会を創出する。知恵の実装の役割の部分では、新たな知恵を展示、発信する。そういったプログラムが必要であろうと。そして、この用途というのは、集会ですね。経験や知恵を人が集まり、語る、聞く、学ぶ、考える空間となって、利用者の想定としては災害の経験や知恵に触れる意思を持ち、拠点を訪れる人。例えば、災害を伝えたい人、知りたい人、防災を学びたい人、それから災害を乗り越える知恵を議論したい人、こういったような方が利用者の想定になるのだろうと。空間をキーに内容を整理いたしました。

これで出てきた空間というのが、人が集まれる空間、議論する空間、展示空間、記録を閲覧する空間、記録編集する空間、創作空間、有形の記憶を収蔵する空間など、このような空間が必要だと考えて、それに基づくプログラム、用途、利用者想定をいたしました。

2-2の仕組みの整理のところでは、こちらは記録を蓄積するもの、それから知恵を記録・蓄積するもの、こういった仕組みが必要だということが1枚目で整理されましたので、こちらで想定された事業プログラム、そして用途、これは主にアーカイブということになるだろうと。そして、その利用者の想定は、災害の経験や知恵に触れる意思を持ち、拠点を訪れる人ということになるであろうと。そういった形で整理いたしました。

2-3の空間と仕組みの掛け合わせと書いてございますのは、例えばこの空間というのが、開かれた空間、日常に生きる開かれた空間と、そこに存在するモニュメントのことということであれば、事業プログラムとしては、日常的な記憶の想起、プログラムということではなくて、日常の中で反復的に五感を機能させることで、東日本大震災の記憶を体の中に残していく。身体化のようなことですね。そういった事業プログラムが必要なのであると。そうすると、用途としては、このような用途を満たすのは広場機能とシンボルではないかと。そして、広場機能とシンボルであれば、利用者の想定、ここまでのところで、実際に災害を学びたいという人ですとか、能動的にかかわりたい方が主になってきましたけれども、このような空間用途であれば、その意思を持つ方だけではなくて、日常使いや観光目的で訪れる人も二次的に訪れて触れることができるのではないかと整理いたしました。

3ページ目です。3ページ目は人材スタッフのところに着目をして、整理をし直したものです。基本的には全て1枚目にある内容を整理しております。人材スタッフとして、企画する人や学びの場をコーディネートする人が必要であろうと。そして、その方々で構成される事業プログラムは、例えば経験の共有ということであれば、意識的に経験を語る、聞く機会を創出するというようなプログラムが考えられたり、学びの場をコーディネートする人のところであれば、知恵の実装で、地域における災害の歴史、リスクの探し方などを学ぶ機会を創出する、そういうプログラムも想定されるのではないかと。そうすると、必要なスタッフというのは、職種的にはディレクター、事業プログラムを運営するような方が必要なのではないかと。そのように人材スタッフに必要な職種、それからその職種の方がどのようなことをするのか。そういったことを整理させていただきました。

その結果としまして、4枚目です。最初に目標としておりましたパターン、博物館機能を重視した場合、広場機能を重視した場合、ネットワーク機能を重視した場合で、それぞれ各要素の相関図を示させていただきました。基本的な考え方としては、1枚目から3枚目までで整理しました機能や要素、こういったものを実現できるような形で、博物館

機能重視型、広場機能重視型、ネットワーク機能重視型をつくらせていただきました。各要素の相関として、丸の大きさが規模を表すイメージになっております。

博物館機能重視であれば、集会や展示・閲覧、記録・創作、アーカイブなどの機能を大きくとるのではないかと。広場機能やシンボルは、その付帯要素ということで、あまり大きなものではなく、人材スタッフはきちんとある状態。これは、コンテンツをメインで展開する形になるのではないかと。既存活動としては、もちろんメモリアル交流館や荒浜小学校などの仙台市が既に持っている機能などとも連携するのではないかと。この場合、期待される効果は、ワンストップでさまざまな学びを得られる。空間のつくり方によっては、誘客施設として機能できる。ただ、課題としては、やはり特定の目的を持つ人だけが訪れ、多くの人にとって縁遠い場所となる可能性が高い。展示などのコンテンツを絶えず更新し続けることが必要。震災メモリアル以外との掛け合わせなど、必要に応じてコンテンツの充足を図ることも必要。そして、3パターンの中では、最も維持コストが高いという課題が考えられます。

では、広場機能重視型の場合はどうなるか。基本的な考え方としては、広場とシンボルの機能を重視します。そして、展示や企画事業などのコンテンツは小規模なものとして一角で展開ということになります。そうすると、博物館機能のほうで大きかった、集会や展示・閲覧、記録・創作、アーカイブといった機能は小さくなりまして、広場機能とシンボルが大きくなります。広場とシンボルの機能をメインで展開する形になりますが、期待される効果としては、日常の交流空間として機能することで、特定の目的を持たない人も含めて、あらゆる人に記憶を継承できる。空間のつくり方によっては、誘客場所として機能するということになります。課題については、同時に多くのコンテンツを展開することが困難。日常の中での反復的なアプローチが必要なので、拠点性の高い場所に整備することが求められ、どこでもいいということにはならないだろうということが考えられます。

次にミニマム（ネットワーク機能重視型）の場合、固有の施設や資料は極力有さず、各団体、施設とのネットワーク機能で充足していく形になります。集会、展示、記録、アーカイブなど、そういった機能は既存のものを活用して、広場機能とシンボルについても既存空間に加える形、人材とスタッフは必要最低限必要ということになるかと思えます。これは既存活動と協力しながら、既存の空間を活用してコンテンツを展開していく、そういったような相関になります。期待される効果としては、3パターンの中では最も維持コストが低いと考えられます。課題といたしまして、来訪者に対する常設の情報発信が困難で、かつ情報の一覧性がない。アーカイブの実施が困難。コンテンツの展開に当たって、既存活動の個人、団体の理解と協力が必須。コンテンツの展開が終了すると、シンボル以外に震災のことを伝えるものがない。そういったような課題があります。

この3つに分けてみた結果、どうやらこの3つのどれかを選ぶというよりは、まずは拠点の性格をしっかりと捉えることが必要であろうと考えております。その拠点の性格というのが、博物館機能重視型の場合はコンテンツによって場に拠点性をつくるというような形になります。広場機能重視型の場合は、その拠点性を持つ場、その場がどこでもいいわけではないと先ほど申し上げました。そこに記憶を刻んでいくことになるのだらうと。そして、ミニマム型の場合は、場ではなくて活動を担う人の拠点性をつくるということになるのだらうと。

ただ、そうすると、この下のほうに書いております、博物館であれば、どこに拠点性

をつくるべきか、コンテンツをどのように充足していくのか。広場機能重視型であれば、拠点性を持ち続ける場はどこなのか。ミニマム型であれば、シンボルの場所について、拠点性を持ち続ける場というのはどこなのかということで、やはり震災メモリアルとしての内容にとどまらず、既存施設との連携や機能分担、ほかに計画している施設との組み合わせなどを考慮しなければならず、この中のどれがいいとか、どれでは足りないとか、どれとどれを掛け合わせればいいのか、そういうふうには形から入ることはできないのではないかと、事務局として感じたところでございます。

そこで、資料1に戻ります。資料1の2番の今回の検討事項です。

最初に、野家委員長からもお話しただいておりましたが、このケースの検討を踏まえて、検討委員会としてまとめる範囲というのが少し見えてきたのかなと思っております。これまでの検討委員会では、拠点に関する背景や理念などから議論を始め、役割や要素、事業プログラムまで検討してきたところですが、今回はこれまでの議論、それから今回提示した資料をもとに、下記の事項についてご検討いただきたいと思っております。

1番、拠点の役割及び機能等、拠点を通して生み出す行為や価値の核（力点）やそのための役割、機能、機能の要件などを検討する。なお、機能の詳細、例えば展示の構成、アーカイブの収集対象などについては基本構想より後の、より具体的な計画の中で検討していく必要があるかと思っております。

2番、拠点の立地場所。拠点の整備にあたっては、既存施設との連携や機能分担、ほかに計画している施設との組み合わせなどを考慮して検討する必要があることから、検討委員会ではその前提となります立地場所の要件をご検討いただきたいと思っております。

3番、拠点の運営。そして、この拠点の運営について、必要な事項についてもご検討いただきたいと思っております。

説明は以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。これまでの議論、大変よくまとめていただいたと思っております。

それで、今回の検討事項を3つ挙げていただきました。まずは、基本構想の策定に必要な事項として、検討委員会が報告書にまとめる内容について、これから審議していきたいと思っております。今説明がありました資料1、2は検討委員会としてまとめる範囲についても記載してありますけれども、こちらについてはこれまでの議論を踏まえまして、事前に事務局と委員長、副委員長で整理したものです。

それから、今回の検討委員会では、拠点の機能や立地などをより具体的にしていきたいところですが、例えば立地については先ほどの資料2のとおり、既存施設やほかに計画している施設との関わりなどを含めて考える必要がありますので、この検討委員会がピンポイントでどこと決めるわけには行きません。大まかな方向性を示すことができればと考えております。

また、展示やアーカイブについては、予算や立地の制約を踏まえながら、個別に深めていく必要があります。ということ、何か手足を縛られて何もできないのではないかとということになりかねませんが、とにかくこの委員会は基本的な方向性を審議するということで進んでおります。本委員会で検討するのは、あくまでも基本構想に必要な事項を検討するというところで、拠点の実現に当たっては、計画や設計といった段階を経て、徐々に細部を詰め具体化していくということですので、その前段階に当たるのが、この委員

会の役割ということになります。ですから、機能や立地の要件という大まかな方向性をまとめ、提言することができれば、それで十分ではないかと考えていますが、今までの事務局の説明と、あと私の今のまとめについて、何かご意見、ご質問等ございましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。

(意見・質問等なし)

それでは、資料1に先ほど説明いただきましたような方向で、報告書をまとめるということによろしいでしょうか。

それでは、続きまして、拠点の役割や機能について話し合います。

これまでの委員会で提案のあったアイデアは、どれも震災の記憶や経験を継承するために必要なものですが、長く継続していくためには、あまり総花的にならずに、ある程度焦点を絞る必要が出てくるかと思えます。

私としては、一つの柱となる大きな目的を立てて、それを実現するために何が重要で何が付随的というか、二次的なものなのかと、その辺の捉え方が重要になるのではないかと思います。その過程で、2つないしは3つの役割であるとか、機能とかに絞っていければよろしいのではないかと考えています。

その際、今回事務局で用意してもらった資料2にあります拠点の性格が参考になるのではないかと考えていますし、仙台市が持っている既存の施設を含めて、ほかではできないことがこの拠点に求められるかと思えますので、仙台でやるということの意味、仙台の中心部でやることの意味、そういう観点から、拠点の役割、目的等を絞っていければと考えています。

それでは、今までお手元の資料とかで説明いただきましたことを中心にして、ひとまず委員の皆様方のご意見を一巡して伺って、柱となるべき事項、あるいは力点を置くべき事項、あるいはそのためにどういう役割が拠点に求められるのかということなどについて、それぞれ大まかで結構ですのでご発言いただいた上で、お互いに意見交換をしていきたいと思っております。

いつも植田委員から始めるのですが、今日は逆に佐藤翔輔委員から一巡して、あといつもは本江副委員長にはファシリテーターでご自分の意見を述べる機会がこれまで一番少なかったと思えますので、今日は存分に発言していただくということで、では佐藤委員から一巡していただければと思います。

○佐藤（翔）委員

ちょっと心の準備ができていなかったのですがけれども、思いついたものだけ申し上げます。後で思いついたら追加させていただきます。

今日、資料2をベースに拝見しまして、これまでの議論を論理的にまとめてくださり、また機能的に結果を出してくださりありがとうございました。大変整理されました。

その上で、その過程の中で結果を見て、抜けているわけではないのですが、私が言っていなかったところの一つが、特に人のところになるのですが、これはスタッフを中心に書いているわけですが、結果としてというか、絶対に大事なところは、地域の人に落ちていかなければいけないというところだと思います。多分この役割の中で言うと、グリーンゾーン「超長期の記憶の継承」のところ、地域にコーディ

ネーターなり、専門用語的にはバウンダリースパナーみたいなことを言いますけれども、そういう地域でぐじゃぐじゃかき回してくれる人とか、サポートしてくれる人を育てるという観点、もしかしたら書いてあるのかもしれないのですけれども、ぱっと見、私が見つけられなかったので、そのところを「超長期の記憶の継承」の力点を置くものとして、要素として、役割として入れてはどうかと、今日の議論を聞いていて思いました。私からは以上でございます。

○野家委員長

ありがとうございました。

それでは、次に佐藤泰委員にお願いします。もしも、ほかの委員の発言の途中で何か質問とか、あるいはつけ加えることとかあれば、ご自由に発言していただいて結構ですので、よろしくお願いします。

○佐藤（泰）委員

いろいろとこれまでの議論のまとめを拝見しながら、一つは要素の組み合わせということで、博物館的とか、シンボルとか、ネットワークとか書いていただいている。それぞれが分けて書いてあるけれども、多分どれをとったとしても、ほかに書いてあることが必要になるのだろうということは言えると思うのですね。ネットワークということをしていても、どこかやっぱり人が集まる場所が必要になってくるし、ミュージアム型といっても、そのミュージアムをつくったら、それは広場であり、人の集まる場でもあったりしていくわけなので、結果的にはどれをとっても、多分同じようなことを求められていくという中で、最終的に優先順位をどうつけていくかという難しい話なのだというのを改めて感じています。

その中で、最近、東北各地のあちこちでいろんなメモリアル施設が完成して、陸前高田の施設も完成してオープンしましたけれども、ああいったものとかほかのものも含めて見ている中で、特に展示の部分に関しては、それぞれ皆さんとてもすごく工夫されているのだと思うのですが、ただ何かこれは、感想を言うだけだから無責任と感ぜられるかもしれないですが、結局パネルの写真とか、そこにある文言とか、そういうものがひたすら並んでいて、初めて見る人にとっては、そこで得られる情報はそれなりにたくさんあるんだろうと思うのですが、ただこれって本にまとめてもいいし、別にミュージアムとしてそこで展開していなくても、いろいろな情報を十分伝えることができるような内容になっていて、あえてミュージアムでやることの意味というのは、なかなかつかめないという印象を持たざるを得ません。しかもパネルになっている情報が、スペースの関係ですごく限られざるを得ないのですね。地域ごとのメモリアルについては、地域のこと限定すればいいでしょうけれども、陸前高田ぐらいの全県的な規模になると、話がとても多岐にわたって、スペース的な関係もあって、全て語り得ない。それを全部語ったら、見る人はとても見切れないという難しさが実際あるなど考えさせられます。また、いろいろなアーカイブがそれぞれやられているけれども、実際はうまく活用するところまではいかない問題だとか、それを継続する人の力というものが続かないとか、あるいはアーカイブの技術的な問題であるとか、コストの問題であるとか、そういったことに関して難しさがある中で、展示をやり、アーカイブをやり、実際にどこまでいけるのかなということが見えてこない、せつかくの構想がお題目

で終わってしまうことにならないかという不安があるのです。

今回、仙台でやるものは、本当に最後のほうに行われる形になるので、これまでの積み重ねとか、経験とか、そういったものも踏まえた上で、やっぱりこういうやり方がいいよねということができたらいいなと思う中で、具体的に本当にどこまでやれるのかなということの見通しを立てて、できることを確実に効果のある形でやるという選択ができるほうがいいなと思うのですね。やっているうちに、いろいろ見え方が変わってきたり、難しさが見えてきて、そこで方針を変えるということは実際あると思うので、そういうことから言うと、この委員会でその報告をまとめるときに、単に計画のメニューを並べるだけではなく、これから具体的な計画を実際に進めていくプロセスの中で何か問題が出てきたときに、どうフィードバックするのかとか、優先順位をどう考えるかみたいなことを示せることが大事なのかなと。結論を出して、あとは具体的に進めてくださいというよりは、この後の具体的な進め方がある程度想定しつつ、その都度出てくる問題を引き受けて修正し、最終的によりよいものに到達できるような、何かプログラムが報告の中に組み込めたら、もちろん簡単なことではないと思うのですが、いいんじゃないかなと改めて思っていました。

○野家委員長

ありがとうございました。

では、続きまして、志賀委員、お願いいたします。

○志賀委員

広場機能重視がいいのではないかなとは思いますが。沿岸部のメモリアルセンターや、津波で壊れてしまった校舎の遺構などは、記憶が建物や土地に刻まれている、残っている場所ですから、やっぱり沿岸部であるべき姿をしていると思います。ただ、仙台の街中という場でやる意味ということを考えれば、沿岸部にある記憶は、この仙台の中心部にはない。それに変わるものといったら、やっぱり非常に「人間」的なもの、例えば語られた言葉とか、そのときに記録された映像とか、本とか、そういうものがまずあると思います。例えばメディアテークには「3がつ11にちをわすれないためにセンター」としてたくさんの震災の記録がアーカイブで残っている。けれども、ちょっとアクセスしづらいし、アーカイブされているものが日常的には公開されていないし、目に触れない。だから、実はもう仙台市として、メディアテークですけども、既にたくさんの震災の記録アーカイブがあるという前提で、それらをもっと充実させ、育てていくようなことを軸に考えてもいいと思います。その広場に、地層のような階層を作って、記憶が集まっていくような感じです。その1つの階層には、本の集まる場所があり、震災関係の本がずらっと並んでいる。その状態を可視化しながら保存し、ここにはそういうものに関するものがあって、手にとって読むことができるなどです。拠点に立ち寄って、本を手にする時間はなくても、いつかその本にアクセスしようと思ったらできるという入り口のようなものは体験できるわけで、いつでも「記憶」にアクセスできる雰囲気を広場に持たせる。そこには守り人のような役割を兼ねた、キュレーター、アーキビスト、どういう名前の人か今は特定できないですが、とにかくチームがあって、そこに集められたものを公開する、必要な情報を渡す、集める、翻訳する、聞く耳になる、などを工夫しながら行う。で、そのチームをつくるときに、世界に一つのユニークな取り組みにならな

いと、世界各国から人は来ないし、日々人が訪れたいと思うような場所にはならないと思うので、専門家1人がそこにいればいいという話ではなくて、その場を守っていく、育てていくというメンバーが決まり次第、このメモリアルの会議と一緒に勉強会から始めて、一つの取り組みに育てていくという、何か学びをしていかないといけないと非常に思います。

そこでずっとたくさんのお給料を出せるゆとりがないとか、その場を立派なものにするというような、大きな建物にするという予算がないというお金の問題が出てくると思うのですが、お金がないとか、予算がないということは、クリエイティブになるチャンスだと思うので、それは知恵を絞ってやるということしか残されていないと思います。

最近、知り合いに聞いたのですけれども、仙台市の科学館では週に何日だったか、2時から4時、おじいさんたちが集まって、ボランティアでいろんな機械について教えてくれたりとか、壊れたおもちゃを直してくれたりもするのかな。あとは、化学物質についての取り扱いなどを一対一でカウンター越しに説明してくれる、そういうボランティアをやっていると聞きました。それが、非常にユニークなので子供たちが殺到しているらしい。取材をした人から話を聞いたのですけれども、実際仙台市でそういうことをもう既にやっていて、予算がなくともそういうふうに自分たちのDIYでやることをやっていると。

専門家1人の振る舞いではなくて、チーム内での学びの積み重ねからアーカイブ化していくというふうに育っていくような場になるということを目指すのと、全部機会や構造だけに頼ることになってしまう。

一方で、記憶を、日々の生活の中で生かして行くとしたら、例えば、学校で2時46分に鐘が鳴るとか、そういうことはそのチームから発信して働きかけていくというようなこととして取り組めると思います。そして、モニュメントを作るとなったとしたら、勉強会の中で、どういう形だったら記憶というものが継承されていくのか、記憶とは何か、公共とは何か、そもそもそういうところから勉強できるように話し合ったり、議論したりできるような、まずチームが先につくられてということが非常に大事だと思っています。

○野家委員長

ありがとうございました。

よろしいでしょうか。それでは、大泉委員、お願いします。

○大泉委員

お疲れ様です、大泉です。

今までの議論、ある意味この委員会って自由に皆さんが発言して、思うがままを語ってきて、行政の方が書いたシナリオを追認するというのではない議論をしてきたと思います。その結果、自分も多分いろんな発言をしたと思うのですけれども、今から言うのが、過去5回の発言と整合性がとれているのか、おまえ随分変節したと言われるのかさえわからないのですけれども、今のまとめていただいたもので前回まで振り返りつつ思うのは、ここに異論はなく、このとおりだと思います。我々はこの議論をしてきたのだと思います。次に、より具体を帯びた拠点は何を重視するのですか、それはどこだといいいのですか、運営はどうやってやるのですかと、より具体的になったときに、好き

勝手言ってきたことが、少し問われる局面に来たのだなと思います。

今、問われたときに私は何を優先したいのかなと思うと、先ほど佐藤委員がおっしゃっていたように、いろんな地区で既に震災の伝承施設ができてきている。その中で後発の仙台が何をやるのと言われたときに、やっぱりパネルをつくって映像を見せて、アーカイブを並べてということは、ある意味ほかの施設でもやっていることなのだと思います。それはもしかしたら財源が山ほどあって、やれるのだったらやったほうがいいんじゃないというのだったら、やってもいいかもしれませんが、でも限られた予算の中で何の優先度が高いかという、私は人の確保というか、伝承は何が途絶えさせるんだ。物が無いから伝承できないのか、アーカイブが無いから伝承できないのかという、やっぱりそこで語ってくれたり、教えてくれたり、ここに行けばわかるよと教えてくれたりする人がいないと、伝承は途絶えるのではないのかなと私なりに感じました。ですので、やっぱり人の確保、人がちゃんといることが、仙台に求められる一番の役割なのではないのかなと思います。

仙台はそこで何をやるのという、各地にできた伝承施設のつなぎ役だったり、津波被災について学ぶのだったらここだよ、揺れのことはここだよ、原発被災のことについてここに行くが一番学べるよということをつないであげたり、またはここで肉声を聞きたいのだったらこういう人がいるよというか、何かそういうつなぐ人のことが最優先なのではないのかなと思います。ただ、それはじゃあ人がどこにいるのとなったときに、やっぱり遠くの不便なところだと、人は集まらないので、利用者というか、そこを頼ってくる人の利便性の確保という点で、中心部というのは、単に仙台というだけではなくて、仙台の街中、中心部ももう一つの意味を持つのだと思います。ですので、仙台の中心部に人が集まって震災のことを学んだり、東北のいろんな施設につないでくれる役割を持った場所があるということが、最も優先されることかなと思いました。

もう一つ、今そういっていながら、それってすごく地味な場所だよねとか、マニアックだよね、よっぽど奇抜な人しか来ないのではないのかなと思うので、そこに集客的要素というか、気の利いたとか、楽しいとか、もう少し集客的要素を、気の利いた要素を加味しなきゃいけないので、それは何かモニュメントなのか、広場なのか、気の利いたところが必要なのではないのかなと思います。この災害文化が物によって伝承されるわけでもなく、アーカイブだけによって無条件に次世代につながれるわけではなくて、やっぱり人と人との間を介してつながっていくんだということを考えれば、人がちゃんといる、意外とその議論って、今回まとめていただいた資料にもありますけれども、こうした人がちゃんと超長期で確保されるという施設というか、場に私は一番重きを置きたいなと。人がやっぱり大事だなと考えました。以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。

それでは、次に遠藤委員、よろしくをお願いします。

○遠藤委員

遅れまして申しわけございませんでした。

力点、役割機能などの力点というところですけども、ちょうど週末に南相馬から檜葉までずっと友人に案内いただいて、回ってきたんですけども、友人は地域の住民や

青年部を支援している方で、本当に生活とその双葉郡というものを自分の言葉と自分の身近な人の言葉で語ってくれて、説明がずっと入ってきて、多分語り部の専門家のリストには載っていないのですよね。でも、すごく入ってきて、例えば私が聞きたい人々の暮らしとか、漁業者の話とかというのを、近くで聞いている人から聞いたというのはすごくよかったです。そうしたら知人が同じ頃に、同じようなエリアを、いわゆる事業、会社の経営とか、そういった視点で回っていたのです。ですから、同じエリアを回るのでも、視点と切り口が違って、でも両方ともすごく考えさせられて、未来のこともいろんなことを考えさせられるすごく貴重な機会になったというのは一緒に、そういう意味で、エリアが合っても、誰にどういうふう聞いていくかによって深まりは全然違うなということ考えたときに、こちらのメモリアルの委員会があって、そこ少し寄せていくとなると、拠点があって、そして被災したエリアをどの視点でどうつないで、どう語って、全体像をどう見せるのかみたいなことは、とても必要だなと。改めて、違うエリアですけれども、つなぐことが重要だなと思ったのです。

そういったときに、私たちが議論してきたことをまとめた資料について、私も賛同するのですが、プラス、東日本大震災の全体像というのは必要かなと思うのです。震災の全体像、そして仙台の全体像ということも必要かなと思います。そうなったときに、拠点とあと沿岸部を結ぶときに、いろんな視点によっていろんな回り方といろんな話の聞き方があるので、先ほどおっしゃっていただいていたみたいに、スタッフ側としてはコーディネーションする力とか、それが分野別とか、いろんな視点によっていろんな方がいることで、見え方が複層的に見えてくるという、スタッフ的にはコーディネーションしたり、見聞きをしたり、訪れる人が何を求めているのかによって、ガイドというか、ナビゲーションできるような施設ということもあるでしょうし、プラス、そうすると語ってくださる方々をきちんと、語る側をコーディネートしたり、記録を残したりするものというの、とても重要なものになるのかなと思いました。

ですから、全体性と仙台ということと、あと伝える側の人と、訪れて学んだり、感じたり、次のビジョンを考える人たちとのつなぎ役みたいなことが必ず必要になって、それが意味これからいろんな機会も増えてくる。道具とかIT技術も進んでくるので、ますますその辺は工夫ができるのかなと思いました。

広場性のところなどは、今仙台市内でもいろんな施設や場の検討がされていて、どこも広場性というのをとても重視した考え方で進んでいると思うのです。ですから、場合によっては、いろんな仙台市内で進んでいる施設や場、その構想とある意味広場という点でお互いに協調して乗り入れることも可能なのではないかと思いながら、この間考えておりました。以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。

それでは、植田委員、お願いします。

○植田委員

私も本当に仙台市の職員の方におまとめいただいて、すごく整理されて、いつも本当に大変なお仕事に感謝しております。

このタイプから申し上げますと、私も広場型のものがないのではないかと考えに至

っております。広場型であることの理由は大きく2つあって、一つは災害文化を持つ都市とうたっていこうということを考えたときに、それをシンボリックに伝えていくものをここに作るのではないかと思うからなんですね。普通、都市化というと、どんどん災害に弱くなってしまおうというか、そのことと非常にニアリーイコールの関係にあるんじゃないかと思うのですけれども、都市が災害文化を持つということにチャレンジするという何か市のシンボルのようなものも持つものとして機能できるからではないかというのが一つの理由です。

もう一つは、建物の中に収めたほうが、発信できるコンテンツはより詳細になるし、濃くなると思いますし、広場型にすると拡散してしまうことが弱点としてあると思うのですけれども、この広場型にすることによって可能なのは、志賀さんもおっしゃっていたのですけれども、身体化ということを考えるときに、やっぱり有効な手段ではないかと考えるからなのですね。

身体化というのは、知らないうちに災害文化が身についているというのが理想なのかなと思うのですけれども、いかに災害文化を身につけるときのルーティンみたいなものをそこにつくっていけるかということだと思うのです。大きくは、2時46分に何か鐘を鳴らすとか、あるいは3月11日の2時46分にはメモリアルをすとか、何かそういう普段のルーティンと違う裏の顔というか、変身ができる場といいますか、普段と3.11とがものすごく変転するようなことができる場所としては、やっぱり広場型というのが望ましいのではないかと思うのです。

何名かの方が既におっしゃっていましたが、ここで事業になるのは、拡散しやすいということを考えると、本気でずっとこのことを考えるような人をいかにつくっていけるか。あるいは、つないでいけるかということが非常に重要になるかと思うのですけれども、例えば、ひめゆりの平和祈念資料館でお話を聞くことができるのですけれども、そこでは非経験者の方が館長になられましたけれども、やっぱりその方はずっと経験者の方に張りついておられた。ずっとその展示をつくる時も、ご一緒に仕事をしておられたということが、時間を隔てた継承というか、非経験者がいずれこの場を担っていくということを考えたときに、そこはぐるぐる頻繁に異動するようなシフトではなくて、専門性を持った方をいかに縦につないでいけるかというところは、本当に予算等難しいところがあると思うのですけれども、外せないものになるのではないかと考えています。とりあえず、それぐらいでお願いします。

○野家委員長

ありがとうございました。

では、私が最初に発言して、最後に本江委員長に十分時間を差し上げます。

私は、なぜ仙台市にメモリアル拠点が必要かということは、この前でしたか、菅官房長官が震災の追悼式典を10年で区切る、やめるということを発言されましたけれども、そうしたらその後どうなんだということになるわけですが、逆に国がやらないのならば、被災地でやるということにもっと大きな意味が出てくるのではないかと思うのです。国がやる形式的な式典ではなくて、まさに被災地が知恵を絞ってそういう式典をやるということに意味が出てくるというか、そのためにはやはり東日本大震災、かなり広域にわたっていますから、その中心部というか、東日本全体を俯瞰できる位置にいるのは、やはり仙台市だろうと思います。仙台市の若林区と宮城野区は津波の被災地ですし、いろ

いろいろな式典をやるにせよ、あるいは、記憶を掘り起こしたり、体験を継承したりするという意味でも仙台市にこういう拠点を設けるということは、大変意味のあることではないかと私自身は考えています。

それから、来年、もう10年になるわけですがけれども、だんだん直接の体験者、経験者というのは少なくなっているわけですね。代替わりをして、つまりこれからは津波も地震も経験したことのない世代が生まれてくるし、それが社会の中心になっていかざるを得ないわけですね。だから、そういう意味でも体験の継承の場、あるいは体験継承のよりどころというか、それがどこかにないと中心を失ってしまい、柱のないところで何をやらうかということになる。そういった意味で、仙台市に何かそういうよりしろ、よりどころがあるということは、次世代への体験の継承ということでも重要なことではないかと考えています。その施設の役割というのは、やはり過去の震災、そしていまだに行方不明者が2,500人ぐらいいるわけですから、そういう追悼の意味と、それから先ほどから出ている伝承ですね。それからもう一つは、やはり災害文化の発信というか、未来へ向けての発信、そういうことが役割になるのではないかとこのように思っています。

それで、先ほど事務局のほうから、3つのパターンが示されたのですが、ほかの委員の方も言及されていましたが、この中で私は広場型が一番望ましいのではないかと考えています。その場合のモデルとして私の頭に思い浮かんだものの一つは、大阪万博のときのお祭り広場ですね。あれは施設ではなくて、屋根があるだけです。そこに太陽の塔というモニュメントがあって、広場で何をやるかということは、市民あるいは観客、参加者の創意工夫に任されていると。

もう一つは、金沢駅前の広場ですね。大きな屋根がついているのですけれども、そこに鼓門といいましたか、金沢市のシンボルになるような大きな門があって、そういうシンボルになるようなモニュメントと、屋根がついてその下でいろんな企画や、あるいは様々なイベントができるような空間、もちろん3月11日が来れば、そこで追悼の式典もできるという、多様な機能に開かれた、むしろ市民や被災者が自由に発想を練って、そこでイベントなり、展示なり、そういったことができるような空間というか、それが一番ふさわしいのかなという考えを持っています。

仙台市は、大きく東北本線、東北新幹線によって、西と東が分かれているのです。被災地は東のほうに偏っていて、既に施設とか、災害遺構とかができているわけですから、それとのバランスからすると、やっぱり西のほう、こっこの中心部のほうに何かそういうメモリアルの広場があってもいいのかなと考えています。そこでは単なる震災の悲惨さだけではなくて、未来へ向かっての体験の伝承や、災害文化の発信というか、ほかの地域への発信、そういったことができるような施設でありたいというイメージを持っています。とりあえず以上です。

では、最後に本江副委員長。

○本江副委員長

そんなに話さないですけど、この委員会で席に座ってしゃべるのは初めての気がしますが、幾つかあります。災害の話で、東北大に災害研をつくったときの議論で僕が覚えていることで、災害って何のことですかと、地震ですかと、津波ですかと。当然そうで、あと台風とか、火山の噴火とか言った後に、パンデミックも災害だと言うのです。まさに今のトピックですがけれども、病気がはやるとこれも災害です。今、武漢を中心に

新型の肺炎ウイルスが広がっていて、武漢には知人もいたのでそわそわしているのですが、あの報道や何かを見ていると、封鎖されて物資が足りないのではないかみたいなことがすごく言われていて、神経をピリピリさせている医療関係者の映像が出てきたり、それに対する世界中からの支援がありますみたいなことが報じられていて、頑張れ武漢という感じだけれども、一方で同時にネットとかの口さがないところを見ると、デジタルキャリアといってアジア系の人が世界中で差別的な罵声を浴びせられて、押し込まれてきたある種の穢れに対する恐れみたいなことが、一気に出てきちゃうみたいなことがあったりして、やっぱり災害は社会のそういう弱いところをついてくる厳しい試練だということが、改めて報道を見ているとわかる。これ見たことあるなと思いながら見えています。そしてそういう中でここに「災害文化を持つ都市・仙台として」と軽く書いてあるが、我々がそのような都市になるというのは、結構強力なステイトメントです。忘れたころに時々起こるということではない。常に災害があって、いつ襲いかかれるか分からないみたいなビジョンの中で、かつ災害に対するカウンター志を持った都市になるって、なかなか強いステイトメントで、立派だし、我々はその資格があるし、やるべきだと思うけれども、これはなかなかのことだなと改めて思っているの、そのセンターをつくるということだとすると、それは結構頑張らないといけないと思っています。

それで、単なるという言い方をすると語弊があるかもしれないけれども、東日本大震災をきちっと伝承するというのもあるが、それを契機に災害と都市との関係、あるいは社会との関係をきちんと踏まえて、それに備える、広い意味で、まちになる。市民がみんなそうしているようなまちになるということだとすると、今日まとめていただいた資料で言う、役割の①の多様な経験の共有・蓄積・発信をすることはもちろんで、でもそれに終わると多分後ろ向きなミュージアムなんだけど、そうじゃなくて、②の新しい知識の創造と社会への実装を行う。災害とともにある社会というのは、このようなものであるということをつくって、自分たちが実行して、そのことを世界中に言うという、とても志の高いことで、それをやるのだと言っているのが大事なところだと思います。それで、③超長期の記憶の継承と④広域的な連携はもちろんそれについてくることだなと思っていました。

もうちょっと具体的にどんなものをつくるかという話をすると、僕は建築系の人間なので、空間のことを考えると、博物館、広場、ネットワークは便宜的にこういうふう典型化しているけれども、多分それがどんなバランスでつくるかということはこれからの議論だと思いますが、この②の新しい知識の創造と社会の実装のトライアルをやるような場所、それは具体的にどんな部屋があるんですかと。そこで何するんですかと考えてみると、今風の言葉でコワーキングスペースみたいな、みんなと一緒に作業するようなスペースがあり、それはアーティストのアトリエのようなものであったり、ファブラボって物をつくるような場所であったり、メディアのような番組をつくったり、音のものを集めたり、展示のものをつくったりする場所。プロが作った出来合いのものを消費するための場所だと、新しいものはつくれないので、いろんな人がそれぞれの能力で関わっていくクリエイティブな場所だと思います。

そういうものを想像していったときに、この間、たまたま、せんだいメディアテークがもうすぐ20年になるというので、伊東豊雄さんが来られて講演会をやられましたが、今言っていたようなメディアをハンドリングしながら、新しい知識を生み出す場所をつ

くる。コワーキングスペースやスタジオやファブがあって、展示もできて、みんなが集まれる場所もあるよって、それはメディアテークだと思ったんです。

メディアテークができたときは、変な建物で、名前もメディアテークって何？みたいな感じだったんですけども、20年ぐらいたって、今世界中につくられる図書館的な建物はみんなメディアテークみたいな感じですよ。じっと黙って本読むような場所だけじゃない。作業スペースがすごく大きくて、様々な活動を受け入れるような場所としてつくるといのが、今日の図書館のスタンダードになっていて、少なくとも日本ではその先駆けとして機能したと思います。

さっき、志賀さんがユニークな取り組みでないと世界から人が来ないとおっしゃったのと同じことを裏返しで言うと、しばらくすると、これからの都市は災害をきちんと引き受けなくちゃいけなくて、そのためにはこういうディザスターカルチャーセンターを持っていないようではだめだとなる。そういう普遍的な取り組みの何か先駆けになり得るのではないかなと期待をしています。では、それはどんな建物ですかといったら、それは多分メディアテークに似ていると思います。大きさはわかりません。

それに近い存在として仙台にはもう1個、10-BOXというのがあって、劇場はあまりちゃんとしたのはないんだけど、芝居の練習場としてはすばらしいのがあって、ちゃんと人もいて、そこを根城にいろんな劇団が活動できるみたいな、演劇に限られていますけれども、あれの災害版、というと何のことかわからないけれども、イメージとしては何かをつくっていくような場所。10-BOX自体はそんなに儲からないけど、そういうものをちゃんと持つということが都市にとって大きな意味があるということ。仙台は支えられるので、そのようなものができるといいかなというイメージを持ちました。

似たものでいうと、前もちょっと言ったかもしれないけれども、民間のヤフージャパンが赤坂に持っているLODGE (ロッジ) というコワーキングスペースがあります。赤坂のど真ん中にあるヤフー本社ビルのワンフロアを誰でも使っていいコワーキングスペースとして無料で開放していて、その家賃全部をヤフーが負担しているんだけど、ヤフーと一緒にビジネスがやれるといいなという野心がある若い人たちとかがいっぱい来て、それでヤフーの人がチョロチョロ動いて、君がつくっているものがおもしろいから、あっちのデザイナーと一緒にやるといいんじゃないかみたいなことをしながら、つばをつけるための施設。でも、そういういろんな人がオープンに行き交うような場所を民間企業がつくって提供して、そこで文化とビジネスをつくろうとしているみたいなことがあるので、何かそういう場所として機能すると、テーマは災害だけれども、災害は結構広いから、新しい知恵の創造と社会の実装ができるような場というのは、何かそういうものとしてイメージできるかなと思っています。

ちょっと違うかもしれないけれども、もう1個言うと、青森にACACという、青森公立大学のアートセンターがあります。建物自体は安藤忠雄さんが手がけた。ギャラリーや、オフィス、小さいけどライブラリーがあって、アーティスト・イン・レジデンスのための宿泊施設と作業スペースがあって、大きいアンフィシアターがある。いろんな人が来られて、生き生きしながらそれぞれの活動をして、その成果がだんだんそこにたまって行って、発表されていくような場所。ACACはアートのものだけど、そういうような人が行き来するような場所として構想されるといいのではないかなというふうにイメージしています。

規模感とかはちょっとよくわからない。

今日も何度も言われているように、それなりにというか、仙台市のアイデンティティに関わる建物をつくろうとしているのだから、どこか空いているところにつくるみたいなことではだめで、今まさに議論されている市役所とか、音楽ホールとか、重要な都市の施設をどう配置するかという大きい都市戦略のストーリーの中にきちんとこの話も入れて、ふさわしい場所に置かれる必要があると思っています。

あと、立地のことで、委員長が西側というお話をされました。僕も同感で、今言ったような施設は新しいタイプのもので、新しいタイプの施設をつくるときに、大ざっぱに言うと2通りのやり方がある。まず、新しい建物だから、何かコンテキスト（脈絡）のないところにつくって、その施設ができたことで周りに波及効果が広がっていくというタイプのもの。あるいは弱くて新しいものだからこそ、むしろ濃密なコンテキストのあるところに置いて、その場所との関係の中で育てられて鍛えられるというようなタイプのもの。今やろうとしているのは、どちらかといえば後者。例えば神戸の「人と防災未来センター」みたいに何もなくて、がっちりしたコンテンツをつくって置いて、自分自身に力があるからいつでも見に来てとみんなを呼ぶというタイプのものではない。中身がまだふやふやしていて、ひよこみたいな建物だから、いろんな人が行き交う場所に置いて、ちゃんと育ててやって、災害文化のインキュベーションセンターとして機能するというイメージがあるかなと思う。

規模は限られたり、コストがかさんだりということはあるかもしれないけれども、仙台の街中、簡単に言えば、この城下町のほうに置いて、既にある人通りとか、既存施設との関係とかを利用しながら立ち上げていくのがいいんじゃないかなと思っています。

そんな感じのことで、運営については皆さんおっしゃったとおりで、人を育成することが、むしろ先行して行われるべきだということも同感ですし、そうしたやり方がいいかなと思っています。

いろんなことを言いましたが、大体こんなところですよ。ありがとうございました。

○野家委員長

ありがとうございました。今、各委員からそれぞれのイメージというか、思いを語っていただきましたが、あと30分ぐらい時間がありますので、お互いに質疑応答してもいいし、あるいは言い残したこととか、これから考えるべきこととか、いろいろあると思いますので、残りの30分はフリートークという形で進めたいと思います。

ただ、これまではなるべく拡散する方向でいろんなアイデアを出し合ってきたんですけども、さっき言ったように折り返し地点に差しかかりましたので、何かアイデアを出さなくても、できるだけ収斂するような形で発言をお願いできれば大変ありがたいと思います。

かといって、制約するつもりは全くありませんので、どなたからでも結構です。発言をお願いします。

○佐藤（泰）委員

私の中でメモリアルの話を考えるときに、シンボリックな部分とか、そういうことも必要なのかなということはずっと考えたりはするのですが、そのイメージとして、人間が想像を絶するようなことに出会った経験というのを、何かシンボルとして示すことができないのかなと。それはすごく恐ろしいものかもしれないが、そういう体験を提供でき

るようなシンボリックな何か、空間なのか何かわからないですけども、そういうものを思う一方で、逆にすごく親密な場として、ある意味小さな火をみんなでくべ続けるような、温かい場として機能するとか、どっちかで相当イメージが変わってくる。もちろん両方というのはあるのかもしれないけれども。

実は昨日、陸前高田に行ったのですけれども、あそこの距離の長い海岸までの真っ直ぐの道、あれはすごくシンボリックなスペースだと思うのです。あそこをずっと海まで歩いていくことの意味というのは確かにあるし、その間に何もないということの意味もすごくある。この後どういうふうに整備されるのかわからないですけども、仮に今のまま、周りに何もないところを真っ直ぐ海に向かって、見えない海に向かって歩くという、その経験というのは、それは何か伝わるものがあるかもしれないなど。

資料館の展示は、いまいち物足りなくて、組織的な災害対応のストーリーはふんだんに盛り込まれているけれども、そこに被災した人々とか、救護活動にあたった人々とか、一人一人に何が起きていたのかという面があまり見えてこない感じがしてしまったのですね。その意味で、屋外のシンボリックな空間のつくりかたというのは、一つの方法なのかもしれないと思いつつ、本当はあれでも足りないのではないかという気もしてしまふ。あのスケール感を実現するためには、それなりの場所が必要だし、相当な覚悟も必要なので、やれるのだったらやってもいいかもしれないとは思っています。

翻って、仙台のことを考えるとき、ここで何か大きな方向性の選択があるとしたら、ああいう空間というのはイメージの中に残すのか、むしろ親密な場として本当に火をくべて、たき火を囲み、火が燃え続けていくような場としての何かをイメージするのか。それによって違うのかなということも思ったので、これは皆さんのご意見をお聞きしたいなと思ったところです。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。ほかにございましたら、どうぞ。

○植田委員

先ほどの話も関連するなと思ったんですけど、やっぱりその災害文化を発信していくといったときに、これが災害文化ですよと誰か偉い人とか、学芸員がゼロから考えるのではなくて、ここの資料にも「あるもの探し」と書いて記録されているのですけれども、仙台に既にあって、もうみんながやっていることで、でもこれも災害のときに役に立つものですよみたいな、例えば芋煮をつくることとかも、ある種炊き出しの避難訓練をやっているような文化になるわけですし、それから何か既に日常にある災害文化を自覚するということとか、例えば芋煮みたいなことを奨励したりとか、牛タン焼いている炭火なんかも、災害のときに結構商店街のほうでガスがとまったときに火になったということも聞いたことがあったんですけども、何かそういう常にあるんだけれども、そういうばこれも災害文化ということがわかるような。

私の勝手なイメージでは、メディアテークってすごくおしゃれで、意識高い系の人が集まるところというイメージがあったんですけども、災害弱者の方って、やっぱり高齢の方だったりとか、障害をお持ちの方だったりとか、そういう方が日常的に来てくれるところじゃないと、意味がないような気がしていて、外国の方とか、ムスリムの方も避難所で食べ物とか、お祈りのスペースとか問題になったりしたことがあると思うので

すけれども、そういうアクセシビリティということも非常に重要になってくるのかなと思いました。

○野家委員長

ありがとうございました。どうぞ。

○佐藤（翔）委員

今の植田先生のおっしゃったことに絡めてなのですけれども、「災害文化を持つ都市・仙台としてのアイデンティティ」と文言入れるのがだんだん怖くなって、大丈夫かなという気がしてきて。何でかという、私かなりこの委員会の冒頭でも言ったのですけれども、今日も植田先生が言ってくれたのですけど、都市化がそれと逆行しているんですよ。それを言うのって本当に大変だし、事例としてはあまりないと思うのが正直なところで、何でないか、なさそうかという理由があって、我々災害が起きる原因のこと、専門用語でハザードと言います。外力の意味なんですけれども、水害であれば雨がハザード、地震だったら揺れがハザード、津波だったら海からの波がハザードなんですけれども、災害文化があると言われていたところは、実はハザードと隣り合わせのエリアにしかほとんどないのですね。もしかしたら、津波関係で言うと、多分三陸のほうがハザードと隣り合わせで、圧倒的に津波頻度が高いと。今回の台風19号で言えば、前もちょっと話しましたが、吉田川流域には、川がいつも氾濫するから逃げるのが当たり前という災害文化があるわけですね。

そういった意味で、2つ考えなくちゃいけないところが、皆さんが言っていて、初めて私気づいてしまったわけなんですけれども、災害文化というからには、本江先生も言ってしまったんですけど、要は東日本大震災以外の災害だったり、ハザードまで考慮するというところに踏み込んでしまうということですね。津波文化じゃなくて、地震文化でもなくて、災害文化になってしまうと、風水害もパンデミックも入ってしまうかもしれないということで、やっぱりそのハザードというものをちゃんと隣に考えなきゃいけないと。

さっき植田先生がおっしゃった災害文化は、生き延びた後の暮らしの部分で、物を食べるということなんですけれども、どっちかという代替性の災害文化で、もう一つ大事なものは、暮らしの部分と命を守る部分の災害文化ですね。こっちが、実はさっき先生がおっしゃったのは、災害の種類に関係なくてどれでもいいから、すごいすぐれた災害文化のところで、もう一つ災害文化、命を守る部分は、実はハザードごとに全然違って、それがハザードと隣り合わせじゃないと、実は醸成されない、養生されない、育成されないという限界も正直あります。

そういった意味で、先生方の意見に反論するわけではないですけれども、さっき西部にというのもあったんですけど、もちろん中心的なものとして西部にやっぱりあるものも大事だと思うのですけれども、やっぱりどこか仙台市の象徴的なハザードの近くに、そういう、また分散させちゃって申しわけないのですけれども、災害文化を学ぶ上で、やっぱりハザードを学ばなければ文化が根づかないことを考えると、複数の災害のことを専門用語でマルチハザードと言いますけれども、マルチハザードの災害文化にするならば、そういうふうに地理的な部分、ハザードに近いということも許容しないと育ちにくいかなと。もちろんそうじゃない方がいいんですけども、今までの我が国を見る

と、災害文化があるところは、そういったハザードと隣り合わせに暮らしている人たちというところが現状なので、情報提供までさせていただきます。以上です。

○野家委員長

今大変重要な指摘をいただいたと思いますけれども、さっき本江副委員長からもありましたが、災害というときにどの辺まで、パンデミックとか、あるいはオーストラリアの山火事とか、そういうことまで含めて考えるのか。あるいは、少なくとも仙台に立地している限りは地震と津波を中心にして考えるのか、その辺も議論しなくてはならないと思うのですが、何か災害文化あるいはハザードということについて考えるところがありましたら、志賀委員。

○志賀委員

ハザードが自然の力だけで起こっているわけではなくて、かなり人為的な理由でも起こっていて、例えば自然環境の破壊とか、自分たちの日々の便利で清潔な生活を迫及するあまりに出てしまったひだのところからとか、福島原発事故についてはまさにそのとおりですけれども、そういうことを学ぶとか、そういうことに対して考えるとなると、かなり想像力と根に深く掘っていかないと、自分とハザードが結びつかないということになると思うので、そういう意味で学ぶということ、中にいる人たちがその哲学とか、その歴史とか、その関係を学ぶということを始めないと、やっぱりその場が生きないということが本当にあると思います。

この会議自体を勉強会の1ステップとして考えたとしたら、これまでの会議でたくさんいい例を、世界中にあるいい例を教えてくださいというのを、事務局の方が、まとめていただけたらすごくありがたい。世界中にこういう例があるというのが、私たちの言葉でしか残っていないので、それもアーカイブとして見たい、検討したい、ユニークなものを割り出していきたい。

あと、具体的なことを言うのを許してもらえれば、広場ということ思い出したのが、イギリスのロンドンにあるキューガーデン。植民地を散々やってきた国が考えることだなとそのときは思っていましたけれども、世界中の種がその地下には保存されていて、何かあったときに備えていると聞いたことがあります。でも、その場所に行くとただきれいな公園で、広場的にも使われている。だからやっぱりそれが何か未来に発信するのであれば、広場があって、その地下にシェルターのような形でそういうものが保存されているようなイメージがある。

だから、広場をつくるというよりは、大地をつくるような、地層までを考えて、その地層の階層の中に、どういうレイヤーでソフトがあるかということを考える。今はちょっと無理だけど将来的にこの経験を話したいとか、何かそういうふうに語りたくなった被災者の方がいたら、そこに訪れて語るようなことができたりとか、そういうことって多分これから絶対に起こってくる。語り部はすぐじゃなくて、多分何十年もたった後に、突然その人の晩年と言われるようなときに語ったりとか、そういうことが必ず出てくると思うので、そういう人たちの話を聞く場になったり、広場はガランとして、見た目には何もないかもしれないけれど、その余白に想像力を担保できるのかなと思います。しかし、墓のようになってはいけません。もっと、木の根のように考えているというか、そういう具体的なのはまだ先かもしれないですけども、そういうのを想像しながら聞いて

いました。

○野家委員長

ありがとうございました。大泉委員。

○大泉委員

今のお話を受けてというよりも、皆さん一巡したのを受けて、自分の考えをまたまとめてみたんですけど、まず災害文化ということの重さを改めて今皆さんの話を聞いて思っています。でも、多分これを引っ込めましょうという議論にはなかなかなりづらくて、程度問題ですけどどうやって引き受けますかねという話にはならざるを得ないのだろうと思います。津波被災が最大の、世界規模で見れば、津波被災の東日本大震災だったというのがハザードの主軸にはなるのでしょうけれども、災害文化というのをどのぐらい頑張れるかということだと思います。

それが、仙台市の都市のアイデンティティに関わる問題だとなったときに、次にその立地の話を考えたいのですけれども、やっぱり決意とか覚悟を示す場だと、どこか隅っこに置いてという話ではなくて、かなりシンボリックなというか、象徴的な場所にこれを構えることが決意を示すことと私は一緒なのかなという気がします。

そういう意味もありますし、もう一つ、人の問題で言うと、災害を伝え継いでいったり、それをやってくれる人で私が思い浮かぶような人の顔って、いわゆる市民活動の担い手というか、既存のNPOで何かやっていて語り部もやっていると、震災伝承だけを頑張る人は多分なくて、障害者福祉やっていたり、子育てやっていたりとか、ジェンダーの問題とか、多分多様なそのほかの関心領域もある人だと私は思うのです。そういう意味で言うと、いわゆる市民活動スペース的なものとの併存とか、共存とか、または機能を被せるとか。

今私がお伝えしたいのは、多分これを議論していたときに、最大の制約は財源だと思います。最後に思考が拡散ではなく、収束するのは、お金がこれしかないからこれしかできないとなるからで、でもそれを最大限かなえるためにどうしたらいいといたら、多分ほかの機能とに重ね合わせられるかなので、さっき議論があった市役所とか音楽堂と重ねれば、単独でメモリアル拠点や広場を持つよりもローコストにできるんじゃないのかと。今仙台で動いているものと重ねるとするのは、財源問題と同時に、立地場所の問題、市民活動領域との人の重なり合いの意味でも、何かと重ね合わせないと成り立たないのではないのかなと思います。なので、市役所がいいのか、音楽堂がいいのかわからないですよ。全くそこは私の中には結論はないですけども、それこそ駅前の商業施設の再開発の問題とか、通り自体をもう道路ではなくてという議論も出ていますし、何かそのぐらいシンボリックな場所にシンボリックなつくり方をして、そこにはいろんな多様な人が集うというのを内包して重ね合わせないと、何かこのメモリアルだけをどこかに置くだけでは、財源的にも、人的にもその都市の決意を示すという意味でも、成り立たないのかなと皆さんの議論を聞いていて思いました。

○野家委員長

ありがとうございました。

○佐藤（翔）委員

今の大泉委員への応援のコメントなんですけれども、先週たまたま似たような出来事に遭いまして、日曜日に多賀城文化会館で海上保安庁音楽隊のコンサートがあったんですけれども、なぜか今年度のタイトルが、「海上保安庁音楽隊3.11伝承コンサート」だったのです。前半が語り部さんのスピーチ3つ、僕の解説で、冒頭と後半はオーケストラと多賀城高校の吹奏楽とのコラボで「花は咲く」の合唱みたいな感じだったのですけれども、要は音楽と伝承に関するイベントの組み合わせだったのですね。1,000人定員だったのですけれども、応募が定員を超えてしまったのです。抽選だったのですけれども、伝承単独でイベントをやったときに、1,000人が埋まるということはないなど。やっぱりそういう音楽みたいな、エンターテインメントというのは恐縮ですけれども、そこで引き込んで、でも結果的に聞けてよかったという感想がずらっと出てくるわけです。そういった意味で、単独ではなくて組み合わせというのはとても賛成だと思って、応援のコメントとして申し上げます。以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。たしか青葉通、駅前を広場にするという計画もこの間報道されていましたが、そういった意味ではいろんな組み合わせがあり得ると思いますが、遠藤委員、どうぞ。

○遠藤委員

私も2周目という感じでちょっと話をさせていただくと、災害文化を引き受けるという先ほどのお話ですけれども、東日本大震災はこうだったよということだけでは、やはりいかなのかなという気は私もしていて、ちょっと資料でスタッフの整理というか、人材の整理のところ、リサーチというところがあると思うのですね。研究機能をどういうふうにつくるか。そこで、新しく直近で起こった災害も含めて、災害文化という情報を集めながら、ある意味災害文化が続いたり、アップデートしていくということとをどういうふうに伝えていけるかということも少し含まれてくるのかなと。そうすると、学会とか、大学とか、実践者を含む市民研究者とどういうふうにコラボレーションしていくかということも重要なのかなということで、研究、学ぶ、楽しく学ぶ、体験的に学ぶということも含めて研究機能というのは大事なのかなというのは、改めて災害文化の先ほどの話から考えさせられました。

それと立地場所の要件のところなのですけれども、私は結構大泉さんと同じ意見で、仙台市役所は建て替えたら40・50年、もっとですかね、建て替えないわけですよ。ですから、100年伝える半分はある意味確保できるということもあるのですけれども、あとはこの市民広場自体も大幅な構想の見直しがかかっているわけなので、東日本大震災を経て、仙台市は対外的に何を伝えていくかというときのコンセプトをずしっと落とす場にも向くのかなと考えたりもします。あと、新しい市役所はかなり高層になるということですから、ある意味眺望とかもいいということになるので、候補としては、仙台を世界に発信する場所としての候補としては、先ほどお話し出していたように、まさにこの市役所周辺というのがあるのかなということと、あと先ほど音楽ホールのお話も出ていましたけれども、今の国などの方針というか決まりで、音楽ホールは昔と違って、音楽者のためだけのホールではなく、まさに開かれた広場として設置するものなんですよと

いう説明を前に聞いたことがあるのですね。音楽をする人、音楽を楽しむ人のためだけではない広場性があるというようにお話を聞いたことがあって、今は方向性として中心部に検討されていますし、震災と音楽による復興ということもずっと続けてきて、ストーリーがあって意味もあるということもあるとすると、それももちろん候補になるのかなと私も考えていました。

それと、やはりメディアテークというのは、震災前から仙台を世界に発信する場所でもあり、震災後アーカイブを続けてきた場所なので、今回の中心部のメモリアル拠点についても積極的な役割を果たしてほしいなと私は思っています。

○野家委員長

今、市役所を高層にするという話がありましたが、大阪の「あべのハルカス」みたいに、屋上を広場にするという手もあるかもしれませんね。

それで、この間、メディアテークで伊東豊雄さんの講演聞いたんです。あのとき伊東さんが目指したのは原っぱだと。原っぱと対立するのは遊園地。だから、遊園地ではなくて、原っぱを目指すのがメディアテークのコンセプトだったと伺ったことがありますけれども、それからすると、少し補足してください。

○本江副委員長

今の原っぱと遊園地というのは、青木淳さんという建築家の方が書かれたもので、建築の世界では割とよく使われるようになったメタファーなのですけれども、遊園地はライドとか、それぞれはしっかりした遊び方が用意されていて、それが至れり尽くせりで用意されているような場所。原っぱは何もなくて、そこで何して遊ぶかをそこに来た人が、誰が今いるかということを見たりしながら遊び方を自分たちでつくっていく場所、制限があまりない。割と分かりやすい対なんですけれども、原っぱのような場所でやることは、何かメニューをフルセットで用意しておくのではなくて、いろんなことが可能になるようにする。思っていたことと違うことを始める人がいても止めないとか、何かそういう覚悟のことも含めた言い方で、文化施設を原っぱのようにつくるというのは言葉では簡単だけど、原っぱ状態であることを許し続けるという、相当いろんなところから子供たちを守らないとだめだということもあるのですけど、そのような比喻の言い方があるということでした。

なので、こういうものが災害文化であるので、これをきちんと陳列して、皆様にご提供するという形には、多分原理的になり得ない。だって、何がそれなのか分からないからみたいなことなので、ある種の今の言い方で言えば、原っぱ的なものとしてつくる覚悟があって、だから全然だめかもしれないとか、ほとんど関係ないことがかなり行われているけれども、まあそうでなきゃ原っぱでいられないのだから、1,000のうち幾つかいいこともある。だから、それをもってよしとするのだという腹の大きさというか、何かちょっとそういうところが要るのかなと思います。原っぱという言い方には、そういう含意がある。

もう1個、翔輔先生が言われた、マルチハザードとか、ハザードと隣り合っていないとなかなか文化が生まれにくい、それはおっしゃるとおりだと思います。一方で、ちょっと反論すると、ハザードとそれに隣り合わせの災害文化があるよということは、ある局地的な出来事に閉じ込めてしまって、河原だから特殊な家に住んでいるとか、豪雪地帯だ

から、こんな食物の貯蔵方法がありますねみたいなことに閉じていると、何か文化人類学的な災害文化みたいなことになっちゃうと思うんだけど、今日の都市の災害はそれが連鎖して起こる。思っていたのと違うことが効いてきて、こっちで大変な目に遭うみたいなことがあるのであって、やっぱり今日的な大都市型のハザードがマルチでいろんなところからこっちに来る。それ全体をディザスターとして引き受けるというような、もうちょっと都市型の大きいビジョンで災害とそれに対応する文化ということを持つ必要があって、それは研究として行われるというよりは、即物的な実践として、災害が起こるたびにそれを学びながらつくっていくということになるのかなと思います。

なので、あるパッケージをつくって、この中に災害文化が入りますというものには原理的にならないので、もっと言うとあらゆる施策に災害文化が反映されているとなっていていかないと、本当はそうならないよなと思います。ますますハードルが上がって、こんな大看板で大丈夫かみたいなことを思いますが、でもそれを国がやりますというと、また何か大きな話になっちゃうし、小さな集落で我々の災害文化はというと、さっきの局地的な話になっちゃうし、人口100万ぐらいで海も山もあって都市に起こることは何でも起こる、ある種のショーケースとしてというか、それをある種経験した仙台市がいろんなのが起こるのよと世界に向けて言うというのが、一つの割とふさわしい立場でやれるといいのではないかなというのは思ったということです。

○野家委員長

ありがとうございました。先ほどの原っぱということで言うと、私が子供のころはあちこちに原っぱがあって、野球をしたりかくれんぼしたりしていたのですが、今はどこにも原っぱがなくなったので、むしろ我々が目指すのは、21世紀の原っぱをどうつくるかということかもしれないなと今話を聞きながら思いましたし、それからそのハザードでいうと、私が子供のころ、広瀬川が氾濫したのですね。ですから、洪水も決して仙台に無縁ではないので、そういったことからやはり災害文化、ハザードということ、かなりいろんな側面から考えなきゃいけないなと思いました。

そろそろ時間ですが、何かもし発言をし残したことがあれば。

○佐藤（翔）委員

すみません、先ほどからハザード議論を巻き起こしてしまっていて申しわけございません。ハザードとセットで考えなきゃいけない概念枠組みがもう1個ありまして、社会の脆弱性という概念になります。ハザードと脆弱性、実はセットで考えなきゃいけないですね。脆弱性というとネガティブな言葉で、弱さ、もろさなのですけども、日本はどっちかという強いので、強さという表現のほうがいいかもしれないですけども、そういった意味でハザードに近い場所でハザードの局地的、固有的な文化を学ぶということもそうですし、人間とか仙台市内に共通する社会の持っている災害に対するハザードに対する強さ、弱さを学ぶことも大事なかなと思いますので、そういった意味で仙台市の言っている災害文化を持つ都市・仙台というときの災害文化は、ハザードのこともそうだし、人間が持っているその強さ、弱さの部分も学ぶのですということところが、何か裏の文言という、どこかに表立ってもいいですけども、意識としてあるといいのかなというのを先生方の議論を聞いて思いました。以上です。

○野家委員長

ありがとうございました。ほか、何か言い残したことがあれば。

○佐藤（泰）委員

メディアテークのことですけど、図書館もあるし、ギャラリーもあるし、いろんな機能をふんだんに盛り込んだ施設でありながら、空き地であるということ、その大切さを意識しながらやってきてはいるのですが、ただ、それを役所の中で続けていくのはすごく難しいのです。空き地を作って運営することにお金がかかりますとはなかなか言えないのですね。そういう意味で、空き地としてのメディアテークをつくり、維持するための工夫なり、どういうふうに説明するのかということはずっと苦労してきたと思うのですが、その時に伊東さんの建築というのは大きかったんですよ。あれによっていろんなことが守られて、空き地も守られたというところがあるのです。伊東さんの力で、仙台が世界に誇る空間が生まれたのだから、みんなで大事にしようと言えた。ただの空き地だったら、それは言えないのですね。その意味で、メディアテークができるためには様々な奇跡が重なったともいえるのですが、同時にそれはただ放っておいて奇跡を待つということではなくて、そんな奇跡を生み出すためのかなり戦略的な進め方もあったと思います。メモリアル拠点に関してメディアテークのことを引き合いに出すのであれば、例えば建築家なのか、アーティストなのか分からないですけども、我々が普通に考えることを超えて、今我々がここで議論しているようなことを、全く別の仕組みとしてつくっていくことを含めた新しいアイデアを求めることによって、初めて行政の限界を超え、今回の震災に真に向き合うことのできる奇跡が実現するかもしれないと思うのです。

それを考えると、多分もしかしたらこの委員会の後に、何かコンペをやって案を募集するとかね。ただ、そこではどういう案が欲しいのかということについてのコンセプトであるとか、相当練らなければいけないと思うけれども、ただそういうことで、全く空き地として機能するような空間とか場をどうつくるかということについての方法は、この委員会でもきっちり戦略を練った上で報告にするようなことが必要なのではないかなと思ったと。

あともう一つ、弱さ、脆弱性ということに関して、単に乗り越えるというのではなくて、その脆弱性を受け入れるというか、それを受け入れることによって、人間同士がお互いに守り合ったり、ケアすることから生まれるのが、災害文化でもあるということを考えていくと、もしかすると、それは災害を超えて、人間や文明の弱さとかを踏まえた、人類にとってとても普遍的で真摯な課題として発信していけるいろんな可能性があるんじゃないかと思いました。

○野家委員長

では、志賀委員。

○志賀委員

話がもしかしたらそれてしまうかもしれないんですけど、海外の美術館で展覧会に参加すると、まとまったコレクションや、ギャラリー自体が寄贈されたり、寄附で成り立っているところが多い。例えば美術館でなくてもニューヨーク公共図書館は運営

の半分が寄附だし、そういう寄附文化みたいなものが日本にあまりないというのは承知した上での話なのですけど、例えば「わすれないためにセンター」のアーカイブの中に自分の記憶を渡す人というのは、多分どこかそれを託したという気持ちがあると思う。そういうことを市民の人がすることで、ここは少なからず自分に関わりのある場所だとか、自分と関係がある場所だというような、特にマルチハザード的なことまで考えるとしたら、皆さん自分の命にかかわる非常に大事なことだし、住んでいる人が自分の場所なんだと、自分と関わりが強くある場所だという関係性をどういうふうにつかというところで、来た人がただ受け身ではなく、寄附までつながるかわからないですけども、支え合っていけるようなというか、自分の記憶がここにあると、何か残していくというような文化の根を育てていけるような気がします。

○野家委員長

ありがとうございました。大分議論が深まってきて佳境に入ってきたのですが、予定の時間が過ぎておりますので、残念ながら本日はここで区切らせていただきます。

事務局は大変でしょうが、今回の議論を踏まえて報告書の骨子をまとめていただきますので、本江副委員長や私を初め、必要に応じて委員の皆様と適宜調整しながら進めていただくことになると思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、次の議事に移ります。2番目ですが、今後のスケジュールについて事務局から資料3ですか、説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは、今後のスケジュールについて説明いたします。

資料3「今後のスケジュールについて」をご覧ください。

1番上、2月4日第6回検討委員会が本日でございます。役割と機能の検討をいたしました。

今回は、3月27日、本日の皆様のお話を整理させていただいて、報告書の骨子を事務局から提案させていただき、そちらをご検討いただきたいと思います。

それから、大体4回ぐらいで書いておりますが、この報告書の骨子について検討し、修正させていただいて、最終的には報告書をつくっていくこととなりますが、この間のパブリックコメントなど市民意見の聴取方法につきましては、こういったタイミングが実施すべきか別途調整をさせていただきたいと思っております。また、議論や検討の進行状況によっては、全体のスケジュールについては柔軟に対応いたします。

そして、夏から秋ぐらいで報告書をいただきましたら、年内に基本構想を策定していきたいと思っております。以上です。

○野家委員長

今回の場所と時間は決まっているのでしょうか。

○事務局（庄子課長）

はい。今回は3月27日18時から市役所第4委員会室で開催いたします。

○野家委員長

12月までに報告書をまとめなくてはいけないということですが、この件についてご質問等ありましたら、よろしいでしょうか。

(質問等なし)

このことを念頭におきながら、委員会での審議を進めて行きたいと思います。それでは3番目、その他ということで事務局から何かございますでしょうか。

○事務局（庄子課長）

次回の日程につきましては、先ほど説明させて頂きましたので、特にございません。

○野家委員長

はい、ありがとうございます。委員の皆さまから何かございましたら、よろしいでしょうか。

それでは、進行を事務局の方に引き継ぎますのでお願いします。

○事務局（高橋室長）

はい、それでは、本日も長時間ご議論頂きまして、ありがとうございます。

以上をもちまして、第6回中心部震災メモリアル拠点検討委員会を閉会いたします。どうもありがとうございました。